



(トークセッション)
「ネットの短歌はどこへゆく？」

発言記録

@大阪短歌チョップ
2014.07.19 14:00 ~ 16:00

<登壇者略称>

田中	:	田中ましろ	(うたらば)
嶋田	:	嶋田さくらこ	(うたつかい)
野比	:	野比益多	(空き地歌会)
牛	:	牛隆佑	(空き家歌会)
ユキノ	:	ユキノ進	(空き瓶歌会)
うずめ	:	天野うずめ	(歌会たかまがはら)
虫武	:	虫武一俊	(むしたけのぞき)

文章起こし： たた (三瀧忠典)

<オープニング> 00:45 ~ 09:25

- 田中 : 大阪短歌チョップにお越しいただきありがとうございます。「うたらば」企画制作の田中ましろです。この時間はスライドに表示のとおり「ネットの短歌はどこへゆく？」ということで、これまでのことをおさらいしつつ、この先ネットの短歌はどうなるのか、ネットで短歌を詠む人たちがどのように進めていけばよいのかということについて、何かヒントを得て帰っていただけたらという趣旨で、“雑談”をさせていただきます。トークセッションの中からもなにか良いところを見つけてメモしてお帰りいただけたら幸いです。まずは七名の登壇者の自己紹介をさせていただきます。
- 嶋田 : 嶋田さくらこと言います。年齢は三十九歳です(会場内笑い)。滋賀県から来ました。スライドに映っている「うたつかい」という冊子を作っています。ツイッターのアカウントを持っている方が百六十名以上集まって投稿してもらっています。
- 野比 : 野比益多(のびました)と言います。日高香織という名前でも活動しています。「空き地歌会」を東京原宿のレンタルスペースで行っています。(空き地歌会を始めたきっかけは)その当時ネットで短歌を始めた人たちが気軽に参加できる歌会がなかったので、そのような歌会をやりたいと思って始めました。
- 牛 : 牛隆佑と言います。「空き家歌会」をやっています。ややこしいのですが、東京が「空き地歌会」で、大阪が「空き家歌会」です。空き地歌会の真似をして始めた歌会なので、同様の趣旨と考えていただければ結構です。
- ユキノ : ユキノ進と申します。僕は四十六歳で、(登壇者の中では)ぶっちぎりで年上なのですが、短歌を書き始めてまだ三年半くらいです。ただ、読者として中学生のときから三〇年以上短歌を読んでいます。二年前に空き地歌会と空き家歌会を真似して新潟で「空き瓶歌会」を始めました。先日、新潟から私は転勤してしまいましたが、新潟で一緒にやっていたメンバーが、この秋に空き瓶歌会を開催してくれるということで楽しみにしています。
- うずめ : 「歌会たかまがはら」をやっている天野うずめと申します。女の子じゃなくてすみませんでした(会場内笑い)。Ustreamを使って、投稿いただいた短歌をゲストと一緒に紹介する番組を放送しています。きっかけは、少し重い話になりますが、東日本大震災のときにツイッター上で「短歌を詠めない」というみなさんのツイートを目にして、このまま詠めない状況が続いたときに、何か一つ気軽に短歌を詠める場があればみなさんが短歌に戻ってきやすくなるのではと思い、この番組を始めました。
- 虫武 : すみません、虫武です。私自身は短歌を始めて丸六年、もうすぐ七年目に入りますが、「むしたけのぞき」という Ustream 番組をしています。元々「歌会たかまがはら」の前半で行われるゲスト歌人への質問コーナーが面白かったのと、東京でも堂園昌彦さんが「堂園食堂」というゲスト歌人と対談する Ustream 番組をしていて、その二番組のよいところを取り入れつつ、両番組で触れることができていないところに自分を取り組めれば面白いのではと思い番組を始めました。
- 田中 : 田中ましろです。短歌 × 写真のフリーペーパー「うたらば」を企画制作しています。二〇一〇年から始めて現在で十一冊、全国約四十箇所につてを頼って、カフェや雑貨屋のフリーペーパーのコーナーに置かせてもらって配布しています。短歌ってとても面白いのですが、それを知らない方が多いので、カフェなどに本が置かれることで、ちょっとは(短歌のことを)知ってもらえるのではないかという気持ちで始めました。それとは別の活動として、短歌をされている方はブログをお持ち

の方が多ということもあり、ブログパーツを作って現在約八十のブログに貼り付けていただいています。「うたらばブログパーツ短歌」に投稿して採用されれば八十ものブログに横断して短歌を
発表できるというのが売りです。最近是一回あたり約四百～五百首の投稿をいただいて、二十～三十首を選歌しています。

＜数年前のネットの短歌＞ 09:50 ～ 28:40

田中　：　では本題に入ります。今日の全体の流れとして、まずは数年前のネットの短歌はどのようなものであったのかに触れようと思いますが、実は僕らもそんなに昔から短歌をしていた訳ではないので、知らないところは会場にいらっしゃる方のご意見も伺いつつ話を進めていって、ここ最近のトピックスを挙げながら今後の話をできたらなと思っています。

まずは「数年前のネットの短歌はどんな感じだった？」ということで、ひとまずキーワードを書き上げてみました（スライドに表示）。みなさんの中でやっていたもの、例えば「夜ぷち（夜はぷちぷちケータイ短歌）」に投稿していたという方は、登壇者を含めてどれくらいいらっしゃいますか？（挙手少数）では逆に、「夜ぷち」なんて聞いたことがないという方はどのくらいいらっしゃいますか？（挙手半数程度）なるほど。では、「夜ぷち」がどんなものであったかを虫武さんに話していただいてよいでしょうか。

虫武　：　NHKラジオで、最初は土曜日の夜に「土曜の夜はケータイ短歌」、後に日曜日に「夜はぷちぷちケータイ短歌」として放送されていたものですが・・・

うずめ：　補足させていただきます。「夜はぷちぷちケータイ短歌」は虫武さんがおっしゃられたとおり、NHKラジオ第1で放送されていた一時間ほどの番組です。パーソナリティーはだいたひかるさんが、選者として本日も来場されています天野慶さん、石川美南さん、加藤治郎さん等が出演していました（会場拍手）。パーソナリティー、選者に加えて、週替わりのゲストが投稿された短歌を紹介していくという番組です。

天野慶（会場）：　多いときは週八千首くらい、バイク便で追加が届きました。

うずめ：　パソコンからだけではなく、ケータイから投稿できるのが「夜ぷち」の一つのメリットだと思います。

田中　：　はい、ありがとうございます。このような感じで全て話していてもよいのですが、時間がかかりすぎるので、他のキーワードはもう少し簡単に触れようと思います。例えば mixi や GREE など、ツイッターが始まる前にSNSで短歌が詠まれている時代があったと思うのですが、mixiのコミュニティ機能がいくつか短歌の場になっていて、クローズドな空間ですので批評も含めて活発にやっていたものもありました。あと「うたのわ」という短歌投稿サイトがあるのをご存知でしょうか。ご存知の方は挙手お願いします。（挙手多数）おっ、これはみなさん結構ご存知ですね。牛さん説明をお願いしてよいですか？

牛　　：　「うたのわ」は各歌人ごとにページがありまして、そこに毎日5首まで短歌を投稿できるということです。短歌の発表がベースの場で、お気に入り登録ができるなどの機能で、コミュニケーションという程ではないのですが交流の場がありました。

田中　：　ありがとうございます。「題詠マラソン」は歴史をたどるとここ数年前というよりはもっと昔から継続されていて、二〇〇三年からでしたでしょうか、十年以上前からずっと続いているブログ上の

イベントなのですが、こちらに参加されたことがあるという方はどのくらいいらっしゃいますか？（挙手少数）最近はそんなに活発ではないのでしょうか。簡単に言いますと、題詠です。一年間通して与えられた百個の題を、その百の順番に従って自分のブログに作品をアップしていくというものです。取りまとめをしているサイトに行きますと、トラックバックのかたちで参加者の作品を読めます。それぞれがみんなで“走り”ながら、百首走り終わった人に対して他の方がブログで作者ごとの五首選をしたりして、感想みたいなものが投稿されるという交流があったと思います。次は「短歌道」ですが、僕は全く分からないので…。

虫武： 私が説明します。短歌道は今も形だけはあるのですが、始まったのは五年くらい前で、だいたい年四回ぐらい選者をゲストに迎えて一般の投稿者が短歌を送るという、ごくスタンダードなコンテストでした。

田中： 選者はどのような方だったのですか？

虫武： 会場にもいる石川（美南）さんがなさったことがありますし。

石川美南（会場）： 生沼義明さんが招いていました。

虫武： 短歌人の生沼義明さんが企画・プロデュースしていて、生沼さんの知己で選者が選ばれていたようです。ベースがガラケーのシステムを基本にしたサイトだったので、スマートフォン対応に移行していなくてサイトが衰退したのかなという状況です。

田中： 「かんたん短歌」をされていた／いる方は会場内にどれくらいいらっしゃいますか？（挙手数人）「かんたん短歌」という言葉を知らない方はどれくらいいますか？（挙手半数程度）そのあたりの説明は野比さんをお願いしてよろしいですか。

野比： 「かんたん短歌」は柊野浩一さんという歌人が提唱されている短歌です。かんたん短歌 blog というサイトもあって、サイトに投稿して、柊野さんが選者になって、投稿したものが選ばれます。今はもう（サイトは）終わってしまっています。

田中： 「笹短歌ドットコム」について。笹短歌ドットコムは実は僕は関わってなくて。会場に聞いてみましょう。「笹短歌ドットコム」に投稿されていた、あるいは名前を知っている方を含めてどれくらいいらっしゃいますか？（挙手少数）名前からどういう場所かは推定していただけるかもしれないですけど。こちらも野比さんでしょうか。

野比： 笹公人さんが「師範」と呼ばれて、ネット上で投稿してきたものを選歌していました。

田中： ここですごく重大なことがありまして、笹さんは笹短歌ドットコムという、笹さんに選をされたい方々が集まってくるブログをお持ちのところから、ご存知のとおり「未来」の選者になられました。結社に移られるときに、笹短歌ドットコムに投稿されていた方々がかなりの確率で結社（未来の笹選歌欄）に入られていたりしますので、ネットで活動しながらそこから結社にもきっちりと、ある意味短歌の深いところといえますが、そこに人をつなげていくという役割を担ったという意味ではすごいサイトだなと僕も思っています。

最後に「短歌サミット」、これは二〇〇九年になりますから、存在や名前すら知らない方もたくさんいるんじゃないかと思います。僕が運営委員の一人になっていましたので話しますと、「夜はぶちぶちケータイ短歌」はラジオ番組だったので、番組を聞いていて採用される方の名前は知っているのですが、どんな方が短歌を詠んでいるの、というのは全く分からなかったんです。それこそ「夜ぶち」が続くあいだずっと、投稿する方の名前は知っているけれど本人は知らないという状況が続

いていくんだろうかと何となく危惧された「かばん」の辻井竜一さんが集まろうよと呼び掛けて、埼玉県のカナダ市で今日みたいな一日限りのイベントをしました。みなさんから短歌を募集して、短歌に関するギャラリーも用意しました。開催の連絡系統はその当時は mixi や、個別のメールやブログというつながりでした。その結果百五十人くらいが参加して、そこで初めて顔を合わせて、名前しか知らなかった方々が知り合いになって、一緒に飲んで友達になったところから、じゃあこんなことをやってみましょうかとどんどん企画が生まれていったという意味では、それなりに意義のあったイベントだったかなと思います。

こんな感じでざっとすべてのキーワードに触れましたが、この数年前のキーワードをまとめていくとどんなことだったんですかね、牛さん。

牛 : ネットでの、ということであれば、ひとことで言うと「孤独」。これはなんとなく分かってもらえると思うのですけれど孤独なんです。僕は「題詠 blog」や「GREE」でやっていたのですが、基本的に孤独です。ひとりで短歌を発表する、というほどでないのですけれど、掲載する。たまーにコメントをいただける。ひとこと。それが何カ月に1回くらいです。かといって僕も他の人の短歌に興味がないかというところという訳ではなくて、(他の人の短歌は)すごく素敵なのなのですが、そこでコミュニケーションをするに至らないということです。短歌サミットには僕は参加していないのですけれど、あれくらいから歌人の交流が生まれたのではないかと思います。それまでは短歌の行き来はあったとしても、歌人の交流までにはつながらなかったのではないかと感じています。

田中 : ネット上のつながりでそこそこあったのは、ブログ同士でリンクを貼り合って、ブログ主同士でコメント欄で会話をするという、ツイッターよりは少し手間がかかりますが、そういうコミュニケーションは実はありました。ふと思い出したのですけれど、岡本雅哉さんが「なまじっか…」というブログをやってらして、そこにみんなで集まって、Purfume の歌詞に付け句するというイベントを定期的にやられていたんですよ。「ぱふゅ〜ま〜ず」という名前をつけて、そこにいる方々二十〜三十人の規模で付け句大会をしているという。それこそ全体から見たら陸の孤島という感じになるのですけれど、交流自体はあったのかなあ。

牛 : そうですね。ただ、ここ(会場)にいるメンバーはたぶん人見知りで、あまりそういうところに入っていけない。というのは、僕は虫武さんの名前は早くは題詠 blog から知っていますけれど、コメントを送り合うまでに一年、初めて会うまでにさらに一年、その上で初めて日常会話を交わすようになるまでに一年かかりました(会場笑い)

虫武 : それは牛さんが私に遠慮していただいけでしょう。今のましろさんの話に続けますと、私も岡本さんのブログには参加してはいたけれど、実際短歌サミット前後で当時(ネットの短歌は)ブログ文化が中心でして、それぞれブログを持ってそこでコメントを送り合うという文化は普通にありました。私も夜ぶちでよく名前をお見かけする方のブログを検索して見に行ったりしていましたし、最初はやっぱりただ名前を見るだけの方にコメントを送るのは恥ずかしいなというのはありましたけれど、最初にブログにコメントしたきっかけというのは、その方のブログで私の歌についてコメントしたり褒めていただいたことがあって、これだったらお礼を言わなきゃなとコメントを書きました。そういう反応しやすいことがあれば、私みたいな人見知りでも当時交流できたかなというのがありましたね。

田中 : 結局のところ「場」ですかね。ネットの中でもそれぞれいろんな場、盛り上がっている場そのもの

は確実にあったんですけども、その横のつながりと言いますか、ある所で短歌を発表している人が他の所に行ってそこでも短歌を詠むというかたちで、手当たり次第短歌をいろんなところに出しているという人は結構稀だったんじゃないかなと思います。というのは僕の実感からしても、さっき言ったとおり「短歌道」はやってないですし、「かんたん短歌」もちょっと行っただけですぐ、あっこれ難しいわと思ってやめましたし、「笹短歌」もなんとなくやめましたし。僕は「夜ぶち」と「うたのわ」あたりが中心で、mixi もやっていましたが、そのあたりでなんとなく完結していて、それで短歌の生活みたいなものは満足しています。

牛　：　それは基本的にはそうだと思っていて、メインの発表の場を複数持っている人は珍しいほうじゃないかなと思います。

＜ここ最近のトピックス、ツイッター＞ 28:40 ～

田中　：　という五、六年前がありまして、ここ最近の話に移ろうかなと思います。今の話を聞いて、そんなことがあったんやと思われた方はかなりたくさんいらっしゃるんじゃないかなと思いますが、ここ最近ではネットの環境、インフラみたいなところがちょっとずつ変わってきていますんで、それに従って変わってきていることってあるんじゃないかなと思ったりしています。最近のキーワードというかたちでまとめています（スライドに表示）。最近のことですので結構みなさん触れてらっしゃるトピックスばかりでしょうから、これを一つ一つ紐解くことはしないで僕の方からはざっと流すくらいにしておきます。「online→offline」と書いたのは短歌サミットが先駆けだったのかもなと思うのですが、こういうふうに簡単にみんなが集まれるということが、以前よりもだいぶ気楽になったんじゃないかなと思います。「Ustream」の生中継で、歌人も顔を出しながらいろんなことができたりとか。「文学フリマ」という場が盛り上がっていたことによって、自分も同人誌を作りたいという人が現れて、ネット上で仲間を募って同人誌を作っていくという流れがあったりとか。文学フリマ（に出品する）ほどきっちりした同人誌を作らなくても、ネットプリントですごく気軽に自分で（作品を）発信できるという環境が整っていたりとか。逆に online から offline に行かない「うたの日」というのがありまして、こちらは説明をした方がいいと思うのですが、「うたの日」を全く知らない方はどれくらいいますか？（挙手ほぼ無し）いまネット上でやっている「うたの日」という歌会があるのですが、ご存知ない方のために説明しますと、毎日ネット上で歌会をやっています。毎日お題が変わって、そのお題に対して二十～三十人が投稿して、その日のうちに票を入れるという、すごいハイペースでみんなが短歌を量産している場がありまして、それはそれですごく盛り上がっていて、僕の考え方ではちょっと前に「online→offline」という流れがあって、みんなが本を作ったりネットプリントで発表して、ネットだけでなく紙などでも表現をするという意欲が実はあって、そういうのに火が点いてきたのかなと思ったら、逆にネットだけで完結している場がもう一度盛り上がったりしている。それが繰り返していくのかなと思うのですが、「うたの日」が今後どうなっていくのかなというのは、僕の中ではすごく熱いトピックスだったりしています。

ざっと話してきましたが、ここでツイッターについて討論していきます。それぞれに聞いてみたいのですが、ツイッターを始めてみて変化があったりだとか、ブログでやっていたときとの差を感じたりするかというところを、何かありますか？

- 牛　：　さっきの関連で言うと、「孤独」じゃなくなったということだと。ブログはさっき短歌の交流ということにしましたけれども、ツイッターは歌人の交流だと思っているんです。最初の頃こそ短歌のハッシュタグ（#tanka #jtanka）がたくさん現れてそこに発表するというのがありましたけれど、次第に普通の友達のようなやり取りが多くなって、逆にツイッター上で自分の短歌を発表の場として使うというのが減ってきているような印象があるんですね。というのが変化かなと感じはします。
- 田中　：　ツイッターといえばさくらこさん。
- 嶋田　：　私は百四十字のツイッター小説「ツイノベ」を書きたくて登録したのですが、百四十字が長くて挫折してしまったときに、ハッシュタグで短歌に出会って、その短歌を真似して作ったのがきっかけやったんで、ツイッターで短歌に出会いました。ブログとかさっき話していたことは全部知らなくて、もともとツイッターで短歌をつぶやいている人に素敵ですねと声を掛けるところから始まったんで、交流から始まって、お返事のように歌を作って、そしたらその方もお返事のように歌を作って下さるという交流が楽しくて（短歌を）始めました。後で短歌を作品としてやっている人がすごくたくさんいるということが、だいたいツイッターを始めて一年ぐらいしてやっと分かってきて、「うたらば」の田中ましろさんのアカウントにたどり着いて、いろいろ変わってきたという感じです。
- 田中　：　まさか自分の名前が出るとは思っていませんでしたが。野比さんはツイッターを始めたとき、その後やってきていて変化を感じたことはありますか？
- 野比　：　短歌を始めたのがツイッターを始めたのと同じで、四年くらい前だったと思うのですが、短歌と俳句の区別もついてない、どっちが五・七・五だっけという状態でした。ツイッターで短歌を始めるようになったので、ツイッターがなかったら短歌を始めていなかったです。
- 田中　：　ツイートとして作品って発表されてましたっけ？
- 野比　：　最初だけです。
- 田中　：　なんでやらなくなったんですかね。
- 野比　：　なんかこの意味はなんだろうって考え始めてしまって（会場笑い）。最初はツイートで短歌を一首ずつ流すのが新鮮で楽しいというのがあったのですが、なんででしょうね。みなさん（ツイートで発表する短歌が）結構減っていきますよね。
- 田中　：　最初はものすごい勢いでツイッター上で自分の短歌を流していて、あるところから詠まなくなったりして。そのことについては後からもう一回確認しましょうか。ユキノさんいかがですか？
- ユキノ：　はじめは短歌は全然作っていなかったんですけど、ツイッターが流行っているからどんなものか使ってみようと思って。何をやったらいいのかなとツイッターを見てみても、みんななんか「夜一人で悲しい」みたいなツイートをしていた（会場笑い）、オレは大人だしそんなことやってもなあと。自分は読者として昔から短歌を読んでいたので、ちょっといっちょ短歌を作ってみるかと思えました。最初はツイッターで短歌を作って流していても、井戸の中に一人で喋りかけるようでつまらないなあと思っていたのですが、いろんな人がフォローしてくれたり声を掛けてくれたりするようになってきて楽しくなってきました。こういうニッチな趣味をやっている人たちが身の回りには少なくとも、世の中には、日本中にはいっぱいいるんだなあと感じました。空き瓶歌会のメンバーを誘うときには（ツイッターの）プロフィールで新潟って書いてある短歌をやっている人にガンガ

ンDM(ダイレクトメール。ツイッターの個人宛てメッセージ送信機能)を送って誘ったんで(会場笑い)、そういう意味でツイッターはかなり活用させていただきました。

うずめ： 僕は短歌を始めたのは高校時代で、ツイッターはここ三年くらいで始めたんで、短歌を始める方が早かったです。なんでツイッターを始めたのかは記憶になくて、知人がやっているし流行っているからやってみようかなというくらいだったと思います。ブログはツイッターより先に初めていて、NHK短歌で採用された歌などを発表していました。

虫武： 私はツイッターを始めてから自分の作風には全く変化はないです。環境的に自分が直接会ったことのない方でも気軽フォローしたり、お気に入り・リツイートとかたちで交流を図れるのがツイッターの良さだとすると、その良さによっていろんな方との距離を詰めることができたかなという意味でよいツールだと思います。ただ私は、もともとツイッター自体は日本語版がなくて英語版しかなかった二〇〇七年ぐらいのときに実はアカウントを取っていて、当時ツイッターには全然人がいなかったんです。こんなに人がいなかったらアメリカでは流行るかもしれないけれど、日本では流行らないだろうとアカウントを放置していたら、日本語版ができたときにちょっとずつ流行り出して、その後ぐらいに短歌の人たちがアカウントを作りだして。私もその当時もともと作ったアカウントを持っていたのですが、短歌の人がアカウントを作りだしたからといって自分も短歌用のアカウントを二つ目に作るのは嫌だなと踏ん切りがつかなかったのですが、みんなやっているから(短歌用のアカウントを)とりあえず作るだけ作ろうかということになったら、いつの間にか発言数が元のアカウントと逆転してしまって、今は短歌用の方をメインに見ているという感じなのですが。こういう感じで人見知りなんで、ツイッターで声を掛けていただけることが実生活上役に立っているというのがあります。

牛： 虫武さんがツイッターで人との距離を詰めることができましたという、ツイッターのすごさが。

田中： さっきの話に戻ろうと思うのですが、ツイッターで短歌を発表するという人と、ツイッターは短歌の発表の場ではなくて、コミュニケーションや雑談をする場であるという人と、今のTLを見ていても分かれるんじゃないかなと思います。僕も昔はツイッターでは短歌をひたすら詠んでいて、逆に言うとほぼプライベートのツイートがないくらい短歌に集中していたのですが、みなさんのお話を伺っていて、先ほど野比さんとなんででしょうねと言っていたことを考えていて、一つ僕の中で答えが出たのですが言ってもいいですか？短歌を発表すると、ふぁぼられるとか反応があるじゃないですか。ブログの頃ってコメントを入れていただかない限り、その反応が目に見えなかったんですよ。足あと機能のようなもので誰が見たかは分かるのですが、その作品が好きかどうかの判断はブログ時代はしてくれなかった。ツイッターだと簡単にふぁぼられたりリツイートされたりして、自分の中で調子に乗ってくるというか。というのと、普段プライベートのツイートをしても誰もフォローしてくれないのに、短歌をツイートするとちょっただけフォロワーが増えるという分かり易い反応がその頃あったので、もっと多くの人に見てもらいたいという気持ちで詠んでいたのではないかなという気がします。この中で昔TLで作品を流していた人は？みなさんしていましたか？

野比： 牛さんが首を振っています。

牛： 僕は最初からここ(ツイッター)は作品の発表の場には向かないなと思っていて、とにかく流れちゃうし見えなくなるし。残らないというのが良さだと思うのですが、僕は結構自己顕示欲が強い

んで残したい。なのでここでは発表するのはやめようとツイッターを始めた頃から思っていました。

田中　：　それってツイッターを始めた頃に、既にツイッターがどのようなものであるかを理解されていますよね。

牛　　：　言い過ぎました（会場笑い）。っていうようなことを（ツイッターでの短歌の発表などを）やっているうちに考えたということです。

田中　：　野比さんはいかがでしたか。僕はもっと見てもらいたいという自己顕示欲によっていっぱい詠んでいたのですが、野比さんの的には思い返すとどうということなんですかね。

野比　：　思い返すと、短歌を始めたばかりの頃に発表の場というのを持っていなかったもので、そこしかないものでそこに出すということをやっていたんだと思います。やっぱりでもふぁぼられると嬉しいとか、そういうのは（TLでの短歌の発表を）加速するものにはなっていたと思います。ツイッターで短歌を流さなくなってきたのは、牛さんは最初に気付いていたけれど、私はだいぶ経ってから気付いたということなのかなあとと思います。

田中　：　なんで発表しなくなったのかは僕もまだ未解決のままでした。虫武さんは今もまだ発表されています？

虫武　：　私は今（ツイッターでは）発表はしていませんが、他の方のツイートを見ていると、今でも発表されている方っているわけじゃないですか。そういう方が今どういう思いでツイッターで短歌を流しているのだろうというのを、会場内にいらしたら聞いてみたいなのがあるのですけれど。

田中　：　どう聞いたらいいのかな。ここ一週間ぐらいでTLで新作短歌を発表したことのある方？あつ、こはぎさん、西村湯呑さん。

西村湯呑（会場）：　まさに自己顕示欲なんですけれども、ふぁぼられるのがめちゃくちゃ嬉しいので。今やめておられるのがなんでかというのをすごく聞きたいところです。

田中　：　それ、正しい質問ですよ。なんでやろう？

うずめ：　僕は今ツイッターで新作の短歌をつぶやくのはうたらばに投稿するとき以外はしていないんですよ。ツイッターで発表したら既発表になって、新作扱い、未発表作品にならないからです。きっかけは角川短歌賞に出そうと思ったときに、未発表でないといけないというのを見て、ツイッターはすべて発表しているので出せないと思って、新作の短歌は（ツイッターに）投稿しないようにしました。

田中　：　その話を伺ってですが、うたらばはTLからの投稿とサイトのフォームからの投稿も受け付けており、TLからの投稿は既発表になってしましますが、サイトからの投稿は採用されなければ未発表になるという差が実はあります。それをちゃんと分かって投稿しているのかは僕は分からないのですが、昔からの投稿者がそういえば少しずつフォームでの投稿に切り替えていっしょるなど、うずめさんの話を聞いて思い出しました。僕も賞に応募するときのために未発表にしておくことがありますし、既発表か未発表かというところが、もしかすると一つのポイントなのかなと思ったりします。牛さんがそうじゃなさそうな顔をしていますね。

牛　　：　賞に応募する人ってそんなにいるのでしょうか。全体でも六百人とかですけど。

ユキノ：　歌をつくるときはオレってすげえ天才だなと思ってツイッターで流してたんですけども、出したあとしばらく経って、あれっと思い恥ずかしくなることもありました。うたらばだと田中さんの選があったり、雑誌にも選者のいる短歌研究詠草にずっと出し続けているのですけれど、人の目を通

じて残っていった歌に対して、オレすげえっていう気持ちだけで出した歌は後で見たとき恥ずかしくなったりということもあって。そういうフィルターみたいな意味でも、ツイッターに自分の歌を思いのままに流すことはやめようと思った経緯もあります。

嶋田　：　私はツイッターでたくさん短歌を詠んでいて、実は新鋭シリーズ「やさしいぴあの」の八割くらいはTLで作った短歌なんです。というのはもともと短歌を真剣にやるつもりがなくて、短歌を残していなかったんで、ツイログの機能を使って（過去の短歌を）拾える分は拾って、加藤治郎さんに選をさせていただいたんです。実は私は、ましろさんが言われていたように、うたらばの投稿を続けているけれど、TLでの投稿をやめてフォーム投稿に切り替えた一人なんです。なぜかという、自分の歌集が出た後にTLで短歌をつぶやくことを控えてしまったんです。自分の看板の本が出てしまったので「嶋田さくらこ」のイメージを潰さないように。TLで自分の気持ちのままに三十一文字にして、歌謡曲のようでもいいからつぶやきたいときもあるんですけど、そんなのも大切なエッセンスとして歌集に入っていたりしたので、大事に温めてどこかで発表したいという気持ちになって、未発表に切り替えました。うたらばで採用されなかった歌をブログに発表するという作業を繰り返しています。

田中　：　ブログに上がっているというのはそういうことなんですか。さくらこさんに聞こうと思っていたのですが、さくらこさんは最近ブログの記事をアップしている短歌をツイッターでツイートするというスタイルでやられているなあというふうに思っていたのですが、いつも作られているのは連作じゃないですか。連作と一首一首で発表するのって違ったりしますか？

嶋田　：　私はもともと一首で勝負するのは得意ではなくて、投稿はうたらば以外ではしていなくて、今は加藤治郎先生の毎日歌壇だけは投稿しています。連作にすると物語になって楽しいし、そして自分で好きな写真も付けられて一つの世界を作るのが楽しいです。そもそもはうたらばフリーペーパーの写真付きの短歌に採用されない悔しさからなのですが、自分のブログで写真を付けて創作活動の一つとして今は楽しんでいます。

田中　：　事前の打ち合わせをしていたときに、自分の短歌を作品として作り込んでから発表するか、コミュニケーションツールとして誰かから反応があるというところを考えるとTLで流すのかで意識の差はあるのかなあという話をしていました。

嶋田　：　「うたつかい」の話で、自分の短歌が作品として提出できるレベルがあると自分で判断する人の話じゃなかったですか。「うたつかい」では五首にタイトルをつける自由詠か、毎回のテーマ詠に投稿してもらうかなのですが、冊子として印字されて投稿した人の手元に届きます。それを投稿した人がみんな読むんです。なので、自分の歌が読まれるという意識がみなさん強いと思うんです。ただTLで流すときは見ているのか見ていないのか分からない人がたくさんいる中で自分の気持ちのままに短歌を流してしまって、それで気持ちよかったで終わってもいい。うたつかいにちゃんと印字されるときは適当に作るのが怖いので、作品として出したいという気持ちの人が多かったりするんですね。TLで「私なんかうたつかいに投稿してもいいんだろうか」というつぶやきを時々発見して、世界で一番敷居の低い短歌雑誌やと思っているんですけど、そんなふうに感じて下さっている。それはみなさんの短歌に対する作品意識と、ただの感情の三十一文字との境目ですよ、牛さん。

牛　　：　そこまで言ってないですけど（会場笑い）。やっぱりネットって「消せる」というのと「消える」

可能性があるのが特性だなと思っていて、活字化は「残る」というのが一番の違いだと思います。ツイートは消せます。僕は正直言って読者の側として、ツイートの短歌は信用できない。

ユキノ： 短歌を書こうと思ったら新聞に投稿したり、結社に入ったり、専門誌に投稿するなどいろんな場があります。結社では年間一万円とか二万円とかお金を払って、毎月十首書いて、提出する際も手書きのところが多いと聞いていて手間がかかります。雑誌に投稿する場合も、短歌研究詠草は手書きで葉書に書いて、ボールペンで書いたら書き間違えて、僕は毎回投稿するときに三枚ぐらい葉書を書き直してから五首をようやく書き終えるんですけども、そうやって投稿するんですね。新聞だって同じように葉書で投稿するので、たかだか葉書一枚五十円とかですけども、手間がかかる。それに対して、ツイッターではそれよりも圧倒的に低い垣根で歌を発表できる。それはもちろんいいことでもあるけれども、我々は歌を作って世の中に発信するんだという覚悟がなくても（短歌を発表）できることが良し悪しでもあるのかなと思います。ちなみに西脇順三郎の「詩の消滅」という面白い詩論があるのですが、その中でこういうものは詩じゃないといくつかの例を挙げています。例えば木々が風に揺れてさらさらと流れる音は自然現象なので詩じゃない。同様に恋の歌も、恋をして何か言いたくなるのは自然現象なのでそれをそのまま言葉にしたのは詩じゃない。外国人が辛いことがあって「おお神よ」と言うのは詩じゃない。同じように、これは詩じゃないというようなものを、僕らはツイッターでは発信できてしまう恐ろしさがあるんじゃないかなと思います。

<Ustream について>01:02:10 ~

田中： 少し話題を変えて、Ustream の話をします。Ustream はたぶんある意味の革新であったと思うのですが、Ustream といえばうずめさんかな。Ustream（番組）を運営する側として、（メディアとしての）利点や、短歌との相性について語っていただければ。

うずめ： なぜ Ustream を使おうと思ったかという、短歌とは関係ないのですが、Superfly のライブを Ustream で見てこんなに気軽にできるのなら僕にもできるなと思ったのがきっかけでした。Ustream と似たものとしてニコニコ生放送もありますが、画面に文字が入るのが見にくくて自分には合わなかった。短歌じゃなくても映像配信できるものなら相性はよいのではないかと思います。

田中： 空き地歌会も Ustream によってオープンな状況を作っているのではないのでしょうか。

野比： 空き地歌会が始まった頃は、結社に入っていない方や短歌初心者が気軽に行ける歌会がなかったような気がします。そこで気軽な歌会をリアルな場所でやったのですが、それを Ustream で配信することで、これまで密室で行われていた歌会がオープンになった。歌会と Ustream（の組み合わせ）によって、そこが開かれるという現象になったのではないかと思います。

田中： 牛さんも同様に（空き家歌会を Ustream で配信）されていますね。空き地歌会を真似したので当然ですが。

牛： 何で配信しているんだろうって思いながらやっています（会場笑い）。妻で歌人のじゃこさんがこんなに楽しいことをしているんだっていうことを見せつけたい。羨ましがれ。という具合でやっていて、あまりそんな効果は考えていませんでした。結果的に空き瓶歌会など、その後に地方での歌会が頻繁にされるようになって、ひょっとしてこれらは僕らの影響だったらいいなと思っています。

田中： とちおとめ歌会、らっこ歌会、福岡歌会（仮）、四国キャラバン歌会などが開催されていますね。ところでユキノさんは空き瓶歌会で Ustream はしなかったですね。そこは意図があったのか、

単純にスキルの問題だったのか一度伺いたかったのですが。

ユキノ： 身も蓋もないのですがスキルの問題です。空き瓶歌会は、いま「羨ましがれ」と言った人にそのとおり乗せられて、空き地や空き家が羨ましいと思ったから始めたわけです。見て楽しそうだなと思って。それまでは歌会って偉い先生にビシッと怒られて半泣きでやるものじゃないかと想像していたのですが、(歌会を) Ustream で見てこれは面白いと思ったのと同時に、これならオレだってできると思ったのがきっかけでした。

田中： 短歌そのものがもしかしたら伝統的にクローズドな世界でやっていて、歌会などを含めたコミュニケーションで短歌を詠む者同士が研鑽し合っているような場だったのですが、クローズドなものなのでどうしても広がっていくのには不向きだったのではないかと思います。Ustream によって潜望鏡のように中身が、別の世界が見えるということが起こると、面白いと気付いてもらえる。歌会の中継と番組とは全然違う使い方だが、Ustream で配信することは広まっていくという意味では重要な役割なのかな。

牛： クローズドされていたというよりは、クローズドという意識でなかった歌会も絶対にあるのですけれど、単純にそこでしていることが見えにくかったというのがあると思います。ツイッターを通した告知で Ustream を見ることで、各自がそれぞれやっていることが見えやすくなった。(それぞれの活動が) 急に生まれたというよりは、単純にみんなの分かるかたちで見えやすくなったというのがあると思います。

田中： 一応「ツイキャス」は? というのも(スライドに)書いてみました。Ustream が始まった頃はユキノさんが断念したように、それなりに知識がないと配信することが難しいものでした。ツイキャスはもう少し気軽にスマートフォンのカメラを使って配信できてしまい、TL を見ていると個人で番組をどんどん作っています。どんどん時代は変わっていきます。ネットプリントの話にもつながりますが、表現をしたい人が発信をしていくツールがここ数年急速に発展していて、ツイキャスを使って個人的に動画配信をして、短歌と絡めてどんなことができるのだろうという考えが起こり得ます。今ここに並んでいる僕らはその時代にいるのかは分かりませんが、(Ustream のような) 一つ前のツールを使っているいろいろやってきている人間がいて、今度はツイキャスを使って新しい短歌の場を作っていく人がいたらいいなと思う。同じ動画配信だけれど気軽にできるという点で、短歌の動画配信部門が新しいステージに行ったらいいなと思います。すごく自分の思いを語ってしまいましたが。

<コミュニケーションツールとしての短歌、作品としての短歌>01:12:20 ~

田中： 先ほどどうたつかいのところで「コミュニケーションツールとしての短歌」「作品としての短歌」という話が出ました。どちらの側面もすごく大事ではあるのですが、ネットではどちらかというコミュニケーションツールとしての意識が強いのではないのでしょうかね。

<ネットで短歌を詠むときに>01:12:40 ~

田中： ネットで短歌を詠むときに気を付けることは何でしょう。ネチケツのような話になってしまいますが。

ユキノ： 先ほど言ったように、悲しいなと思ったら、五分後に悲しいなという歌を世界に向けて発信できて

しまう。孤独だなと思ったら、孤独だなという歌をそのまま出してしまう。これはすごく恐ろしいことです。僕はネットで知った場とは別に、新潟で山田富士郎さんの超結社のリアルの歌会に出ていました。それぞれ結社に所属している僕の母親のような年代の方たちと歌会に出ていましたが、歌の作り方が全然違い新鮮でした。ネットでやっているとアイデア重視というか、面白いことを考えたら歌にして発信する作り方が主流だと思うのですが、富士郎さんの会のお姉さん方は、歌の種になるささやかな題材を、言葉を何度も何度も作り直して、一首を作るのにとても時間をかけていて勉強になった。それまでオレのやっていたことは安直だなあと思うようになって、じっくり詠もうと思うようになりました。

野比：それはすごくあると思って、個人的には全く同じような感想を持ちますが、全体として考えるとそれは悪いことではなくて、感情のままに作る人がいてもいいと思います。そこを全体で語るのはどうなのでしょう。

田中：僕もどちらもあっていいと思います。さくらこさんは歌集を出したからTLで短歌をツイートできなくなったという話があったように、きっと自分の中の気の持ちようがあって、自分のツイートしたものはそのまま感情を出した歌であるという認識と、作品として（短歌を）作ることの境界線をはっきりと持てていれば、その方は大丈夫だと思います。「作品的」に詠むという気がないのは、それはそれでよくて、作品として詠もうという意識が芽生えたときに、今までどおり詠んできたものを「作品です」とすぐ言うことではない。極論であるが二つの作り方があるとして、自分が詠んでいる歌がどういう歌であるかという認識を持ちながらやっていった方がいいと思います。

＜「ネット短歌」について＞01:17:10～

田中：ちょっと話が重くなります。「ネット短歌」という言葉があると思いますが、「ネット短歌」は作風であると思うかという議論をここでしたいと思います。

牛：先ほどユキノさんの発言に「ネットで短歌を詠む人たちはアイデア重視だ」とありました。そのようによく語られがちですが、本当にそうなのだろうかと疑問に思います。「ネット短歌＝アイデア」なのでしょうか。

うずめ：あまりうまく言えませんが、「ネット短歌」というのはいま最近出てきた言葉ではなく、もっと古くからあります。昔に「短歌ヴァーサス」という短歌雑誌があって、一度ネット短歌についての特集をしてそのあたりから議論になっていますが、結局答えの見つからないまま今に至っていると思います。

田中：まとめるの大変やなこれ。ネット短歌は僕は作風ではないと思っていて、うずめさんの意見に近いのですが、先ほど言った数年前より以前は結社短歌と対立するかたちでネット短歌という表現をし始めた部分があったんですよね。そのときに結社に所属している方々が、ネットで詠み始めた人たちを、自分たちとは違うんだと分けるために（「ネット短歌」という用語が）作られ、それがずっと慣習的に残っているという経緯があるのかなと思います。ここ数年のツイッターなどが始まってからの短歌の世界はそういうふうに二分割するものではないですし、結社に所属の方々も普通にツイッターに登録されているので、「ネット短歌という作風」というふうに語ること自体が既にナンセンスではないかと思っています。どこかでいわゆる「作品」として詠んでおらず、感情をそのまま三十一文字にした作風をそれぞれで「いいね」と言い合う場があるとしたら、そこは作品意識が

あまりない場になっていて、昔揶揄されたネット短歌という表現になっている可能性はある。現在ツイッターで短歌を詠んでいる方々の作風は一つに絞り切れる訳ではないですし、ネット短歌という言葉ではないかなと思います。ネットという場としての考え方あると思いますが、作風ではない。

野比：今回このテーマが出たときに「ネット “の” 短歌はどこへいく」という “の” を入れるかどうかの議論が出たのもその点の話ですね。

田中：事前の打ち合わせをしているときにも議論してまして “の” を入れないと誤解が起こる気がするという不安がありました。敢えて「ネット “の” 短歌」という書き方をしているのは、登壇している七人の中では「ネット短歌」というものをどこかで誤解されないようにしたいなという思いがあります。更に言うと、それこそ短歌研究新人賞や角川短歌賞にネット出身の方が上位に食い込むということが普通に起こり始めています。ネットで短歌を知って始めた方も、結社で詠まれている方と対等に戦えるというか、戦えるという表現はおかしいですが。

牛：まだ食い込めていないです。もっと食い込みたい。

田中：牛さんの思いは、ネットで短歌を始めましたという方が総合誌の賞を取るところまで食い込みたいということですか？

<短歌の腕を磨くには>01:23:10～

虫武：蒸し返したいというか、ここで「ネット短歌」と括弧付きで書いていますが、そもそもネット短歌ってなんやねんと言いたい。自分自身の体験や周りの方々を見ながら思ったこととして、短歌を始めたのがネットだったとしても、より短歌が上手になりたい、向上していきたくと思ったときに、ネットだけで完結するのではなくて、オフラインの歌会や結社に行かないと、ネットだけで短歌がすごく上手くなるという状況は、今ネットの環境にはないと思っています。そういう意味で、登壇者たちはネット出身歌人ですと言うことはできるけれど、純粋にこの七人が「ネット短歌の人です」と果たして言えるのかどうか、蒸し返すようだがこの際聞いておきたい。

田中：素晴らしい蒸し返し方で、次の質問は「ネットで短歌を始めた人が結社などに所属しないままに短歌の腕を磨いていくにはどんな方法があるのだろうか」でしたが、虫武さんが言ったオフラインの歌会が一つですが、他に何かないか。牛さんおすすめの短歌上達術は？

牛：結社に入ったらいいのに（会場内笑い）。

田中：一つの選択肢として短歌上達のためには結社に入るといえるのがあると思います。この場合でそれを話してもありきたりになってしまうので、それ以外にありませんか。

虫武：あのですね、私はすごい短歌に対してはちょっとマッチョな考え方なんですけれど、腕を磨くなら基本的にどんどん（短歌を）作ってどんどんオフラインの歌会に出て行って恥をかくのですが、そういう体験がないとなんでも上達しないし短歌も上達しないんですよ。ネットだけでもオンライン歌会がありまして、オフライン歌会や結社の生の歌会への参加が地理的に時間的に難しいという方はオンラインの歌会でガチっぽい歌会も探せばあると思うので、そういうところで失敗を恐れず自分なりに評を書いたりとか、地道でマッチョなことをやっていかないと上達はできないんじゃないかなと率直に思います。

田中：うずめさんは結社（ポトナム）に入りましたが。

うずめ：僕も虫武さんの話を聞いてすごく思ったのですが、最近は失敗すると叩かれるというのが怖くて、

失敗しないようにしようという流れが短歌に限らず強いのかなと思います。失敗しないようにするのならこのままネットで一人で短歌を詠んでいった方が気軽なのかなと思います。でもそれはツイッターで短歌を詠んでいる人には失礼ですが、自己満足であると思います。自己満足な歌からみんなが満足する歌を詠むようになるのであったら、虫武さんが言うように失敗を恐れずいろんなところに出ていくのが近道なのかなと思います。

牛　　：　僕はそうは思っていません。そもそも短歌の腕を磨くというのはどういうことですか。

田中　：　質問をディスってきましたね。びっくりです（笑）

虫武　：　牛さん、自分が作り始めたときの短歌をまだ残していますよね。明らかに今の自分から見て下手だなと思うわけじゃないですか。自分の作品を見て自分の中で上手いという変化が分かることがある種の上達じゃないかと思っています。

牛　　：　すみませんでした（笑）でも思うのが、虫武さんやうずめさんの話を聞いていて、より批評の厳しい場へ出て行って、叩かれて、そこで高みを目指していくんだというニュアンスを感じたので、そういうことではないんじゃないかなという。

田中　：　この場で断定をしなければいけない話ではないと思うので、いろんな方法があるよということをみなさんが分かっていたらなあと思うんですね。確かにオフラインの歌会に参加すると、その場でリアルに、面と向かってこの部分が甘いと思うとか、この字余りはちょっとリズムが悪いとか笑顔で言われたりするんですが、そういう笑顔で言えるってすごい大事なんですけど、ツイッターって笑顔が見えないんですね。どうしてもツイッター上でこの歌のここが悪いという話は出にくくて、しかもTLでなんとなく流した歌に関しては良かったときにだけ反応があるというパターンが多いので、そのまま悪かったところに気付かないままに歌が流れていってしまうということがネットでは起こりやすいかなと思います。とはいえ人と会って話をするのはシャイすぎて無理だなと思う人はいらっしゃると思うのですが、僕の思いで言うと、最近ツイッター上でもちゃんと歌会の形をとれば成立しているのなと思ったのは、御糸さちさんが運営している「ときどき歌会」というTL上の歌会があるのですけれど、みんなで短歌を募集して、歌会でするので人の詠んだ短歌に対して真摯に率直な意見を言っても許される場というのを、オープンな場ではあるのですけれど上手く作り上げていらっしゃるなと思ひまして、いきなりオフラインは難しいという方は、ネット上でもやっている歌会でちゃんと批評もある場というのもありますので、逆に最初は歌を批評することが無理だな、人の歌の悪いところを指摘するのが無理だという方もいると思うので、最初は見よう見まねで感想でもいいから言ってみたり、周りの人の意見を読んでもみるのもいい。ただちょっとネガティブな意見も出ている場を選んで探すのが上達には近道になるんじゃないかなと、ネット上でも思います。これはオフラインだったら（ネガティブな意見は）間違いなく出るので、肉体派の方はそっちのほうがいいのではないかと思います。どうですかね、さくらこさん。

嶋田　：　歌会じゃなくて、結社に所属しないままに短歌の腕を磨く方法は、投稿をするということで、誰かの目を通して自分の歌が選ばれるか選ばれないかということで、私は、今はうたらばと毎日歌壇しか投稿をしていないのですが、例えばこの間だったら俵万智さんの「サラダ記念日・短歌（うた）くらべ」とかいろいろな投稿する場所があるのでそういうところに出してみても、自分が出したら自分が選ばれなくても、選ばれた歌が後で発表されるので、それを見て、自分との違いを感じてみるのが一つ。あとはうたつかい感想会というのを時々やっていて、牛さんがうたつかいの参加者を集

めて感想を言い合おうというのを一年半くらい前からやっていて、その当時は五首の自由詠が百二十人いたので、その六百首の中から十首選んでくるなどして、それを五～六人で語り合う。その歌のどこがいいのか、どこが悪かったのかなどを聞く。私のように歌会が怖かった人にとっては勉強になりました。最近はどうにか感想会 in 滋賀を私の自宅で何回か、なぜか村田馨さんの主催でやっていて、何人かの方に来ていただいて、結構時間をかけて読み解くのが私の短歌の上達に役立っています。

牛　　：　感想会や歌会は結社で日常的にやっていることで、僕は無所属なのですが、おそらくこの登壇者の中で結社が一番好きな人間なのですが、結社というものに肌が合わないという方はいるはずなので、僕が活動を振り返ってみると、結社に所属せずに結社的なことをしようというところに全部行き着くかなと聞いていて感じました。

田中　：　嶋田さくらさんの話からつなげますと、ネットでもオフラインでもいいのですが、歌会に参加することのもう一つの意義を言うと、選をしなければならぬ場に行くというのがあると思います。自分が発表をして感想を言ってもらったりしてダメなところを言ってもらうのが一つの大きなポイントなのですが、逆に自分も誰かの歌を選んだりとかここがダメとか言わなきゃならないとなると、嫌でも人の短歌について考えるという時間が出来上がる。その時間が読み捨てじゃなくて読んで終わりじゃなくて、自分の中でぐるぐるぐるぐる良し悪しを判断する時間になる。投稿してそれが選ばれるか選ばれないかじゃなくて、自分の歌を磨いていくというのにはオーソドックスですがよい方法ではないかと思っています。

虫武　：　この話題もすぐ次に移っていくと思うので一つだけ言いますが、このような話を聞いていると短歌をやっているからには上達を目指さなければいけないとびびってしまうかもしれませんが、私は別に短歌の上達を目指さなくても短歌を続けてもいいんじゃないかと思っていて、それは個々人の短歌に臨むスタンスの違いかなと思います。何事もやるからには上達した方が、上を目指した方がいいと一般的には言えますが、だからといって目指さない生き方として、自分の人生の明るさの肥やしとして、人生のそばに置いておくような明るいものとして短歌と付き合っていくというのもありだと思うので、マッチョっぽいことを言ってビビらせてしまったら申し訳なかったです。

牛　　：　虫武さんに付け加えて言うと、いいなと思うのは、最近はいろんな短歌の楽しみ方があるなど。それこそ「うたの日」はとても楽しい。あれがずっと続くなら死ぬまでやろうと思える。以前に飯田和馬さんが「短歌は新聞に投稿することだけで一生楽しめる趣味だ」と言い切っていてその通りだなと思います。投稿に物足りなくなったらネットプリントで発表できる、いろんな選択肢があるというのが今の状況だなと思っていて、それは素晴らしいことだと思います。

田中　：　逆にこの後の話がしづらくなってきましたが、まだしばらくネットの短歌の中心はツイッターなのですかねということを話そうかと思っていたのですが、フェイスブックでなぜ根付かないのかということが僕は疑問なんです。フェイスブックに歌人の方は結構登録しているのですが、そこで歌会をしようという話は出てこないんですよね。フェイスブックが実名だからですかね。世の中の中心はツイッター全盛期からフェイスブックに移行していると思うのですが、短歌界隈では告知はツイッターでしているなど。ネットの短歌の中心はツイッターでしばらくはいくと思うのですが、その先は新しい場ができると思うので、未知のサイトに期待しています。

ユキノ：　短歌の上手い下手とかそういうことじゃないのですが、さっきの話と関連づけて話しますと、人の

歌を読んで「すげー」と思うことが、自分の短歌が変わっていくきっかけになるんじゃないかと思っています。そこで、ネットを使った読書会をやりたいなと考えています。僕は東京にこの間引っ越してくる前から、石川美南さんの「さまよえる歌人の会」にときどき参加させていただいていました。短歌はニッチな趣味なので、普段は身の回りの方と短歌の話題をすることは無いのですが、その会に行くと人がどんなふうに歌を読むのかを聞くことができるとても良かったです。そのまま新潟にいたらこのような場には参加できなかっただろうなと思ひまして、それをネット上でできないかなと。例えば田中ましろさんと嶋田さくらさんの歌集が出たときにも、批評会のように（リアルに）集まれなくても、オンラインの批評会ができたらいいですし、新しい総合誌の号が出たら、この内容が面白かったとか、時評のこれがよかったよねとかのそれぞれの感想を言い合う、そのような場ができたらいいなと思っています。

田中　：　ちょっと余談になるのですが、「うたの日」をされている、ののさんがツイートされていたのを見て気になったのが、うたの日は投票し合うシステムなのですが、投票なしで評をし合うだけの（オンラインの）場をシステムとして作ってみたいと言っていました。投票というちょっとした楽しみの部分をなくした上で、ネットで評だけの場が成立するのかなというのが気になっていて、実現したら見てみたいです。

＜今後の抱負＞01:43:30～

田中　：　残り十五分なので登壇者七人に今後自分のやっている場についての抱負を語っていただいてこの場を締めようと思います。

嶋田　：　たぶん私がこの中で一番未来の活動について考えていないと思うのですが、うたつかい編集部では初号を発行した九月に毎年一年の計画を立てます。この一年はできそうだから一緒にやろうと。実は投稿者が次号は百六十二名と出たのですが、発行部数がこの二年くらい毎号三百五十部だったところ、知り合いの歌人さんが増えてきたり、多めの部数を欲しいという人が出てきたりして、それでは足りなくなってきてたので今回は五百部作りました。発送代が自分のお小遣いの範疇を超えてきたのでこのまま投稿者が増えていくと続けることはできなくなるのではという危険を感じ始めました。それは実は二年ほど前から投稿者や友人たちがとても真剣に考えてくれていたのですが、今やっと分かってきたという（笑）参加者二百名まではなんとか自分が頑張れるかなと思っています。うたつかいの冊子の裏に「うたつかい口座」の案内を載せているのですが、そこに多額の寄付をして下さる投稿者がいらして、すごくありがたくて、お名前を公表することはできないので個別にお礼を申し上げているのですが、ここでもお礼を述べておきます。あとは私の体調のなども心配して応援くださっていますが、一応この秋から一年間は頑張りますので、その先は分かりませんが、どうぞよろしくお願いします。

野比　：　空き地歌会のことについてですが、私も未来のことは考えてなくて、二〇一一年に始めて三年経っているのですが、三年間の中でもニーズが変わってきています。当初は歌会をやっているだけで珍しいし見たことないし、どういうことをやっているのだろうとUstreamを見ていただいていたのですが、だんだんみなさん自分で歌会をやるようになると、空き地歌会をやっている意味がどこに出てくるのだろうと考えています。毎回歌会が終了するとアンケートをとって、今何が望まれているのかというところで変化しているので、個人としてこうやりたいというのはあまりないというふうです。

牛　　：　空き家歌会は百回を目指します。第九回空き家歌会を九月に予定しています。後日ブログやツイッター

で告知するのでみなさまのご参加をよろしくお願いします。空き家歌会はもちろん継続的にやっていくのですが、もともとこの会(大阪短歌チョップ)は三年位前にうずめさんとの日常の会話で「せっかくみんな関西にいるのだからなんかできないか」というところから始まったものです。またこんな感じでみんなが個々に活動して、それは当然なのですが、一回ぐらいシャッフル、ミキシングできないかと考えていて、そういう場が定期的にあれば自分のことを考えるきっかけになるのではないかと。(短歌の) いろんな楽しみ方がある中で、自分はどうしていこうか、ということそれぞれが考えていくきっかけになれば。大げさですが、そんな感じで誰かがやってくれればいいなと思っています。

ユキノ： 空き瓶歌会は、僕は新潟を離れたので、新潟のメンバーがやってくれることになって、ツイッターでそれを知ってすごく嬉しいです。僕はこれまでうたつかい、うたらば、歌会たかまがはらに投稿させてもらっているのですが、それぞれ主宰者のみなさんがいろんな負担をしながら運営してくれています。結社もみんな休日を潰していろんな作業を分担しながら維持されているのだと聞きます。彼らが短歌を楽しむ場はそうやって誰かが作ってくれているのですが、僕は大人なんで、自分がその場に乗っかって楽しむだけでなく、自分も何かを負担してみんなが楽しめる場を作っていきたいなと思っています。

うずめ： 歌会たかまがはらの今後についてですが、二つ考えていることがあります。一つは歌会たかまがはらを五十回やること。いま二十六回ぐらいなんで、あと二十四回くらい続けたいなと思っています。もう一つはすごく個人的なことなのですが、ゲストに野比さんと呼んで空き地で公開録画をやりたいと思います。以上です。野比さん出てみませんか？

虫武： むしたけのぞきは個人的事情で止めているのですが、なんとか今年十二月か来年一月くらいに一回やって、そこから年三回くらいできたらいいなと思っています。私個人の短歌の活動については「来年も短歌をやめない」くらいの緩やかな感じでできたらいいなというところです。むしたけのぞきはもうちょっと、結構面白い感じでやっていくのをモットーにしているのですが、このあいだ堂園昌彦さんが奥村晃作さんと今井聡さんと呼んで久々に堂園食堂をやっていたのがすごく面白い感じで、堂園さんも面白い方向でいっちゃったら私はどうなるのだろうと(笑)勝手に心配はあるのですが、いい意味で共存できたらいいなと思っています。

田中： 「うたらば」そのものの活動は短歌を知らない人に短歌を届けるというコンセプトでやっているのですが、今日もあったように結社というワードが出てきているなか、結社が何物かを知らない人はまだまだたくさんいて、ネットでやっていると(結社の)細かいことまで知る機会はないんだろうなと思っています。うたらばに投稿している方はほぼ結社を知らないのですが、うたらばという場には結社に入っている方もいるし、全く知らない方もいて、いい意味で融合している場だと思うので、投稿者に結社に入っている方に例えばインタビューしてみて、結社ってどうなんですかという記事を作って、それをうたらばのサイトにアップする。結社とネットの橋渡しになるような記事を今年中に書ければいいなと思っているので、うたらばに投稿して結社に入っている人は僕から声が掛かるのを待っていてください。

長時間でしたが、僕らの“雑談”の中からネットの中で短歌を詠んでいく上で、今後自分がどんなふうに詠むかなというものをこの二時間で感じとっていただければありがたいなと思います。

<了>